

# いちょなみき

icho namiki

岡山大学広報誌



OKAYAMA UNIVERSITY

2011.12

No. 63

特集

Special Section

## 「美しい学都」の実現へ

地域総合研究センター開所で

協働の取り組み強化

- 卒業生その人に聞く **伊勢崎 淳さん** 備前燗の重要無形文化財保持者 (人間国宝)
- 研究室訪問 **山中 寿朗** 岡山大学大学院自然科学研究科 准教授
- きらり岡大生 **酒井 詩織** 教育学部3年
- ホームカミングデイ 2011 を開催 / 国際的視野を養成 / 新理事紹介
- News & Topics 大学の動き
- 環境生命科学研究科と自然科学研究科に改組

岡山大学地域総合研究センター AGORA 開所記念式





森田 潔 学長

# 美しい学都 の実現へ

—国際学術都市「美しい学都岡山」を目指して—  
**地域総合研究センター (AGORA)**  
5つのミッション

社会貢献  
活動強化

地域研究  
情報発信

## 学都構想実現

まちなかキャンパス  
グローバル人材養成

シンクタンク  
機能発揮

窓口機能展開

## —地域総合研究センター開所で、 協働の取り組み強化—

森田潔学長が「森田ビジョン」で掲げた「美しい学都」の実現に向け、知的拠点となる「岡山大学地域総合研究センター (AGORA)」が11月15日、開所した。

同センターは大学の社会貢献活動の調整・強化▽シンクタンク機能▽地域連携に関する窓口機能▽研究の蓄積と情報発信—を活動の柱に、大学が岡山県内の自治体、経済界、各種団体などと協働してさまざまなプロジェクトに取り組む。

「地域の人々と連携しつつ、地域の善き頭脳、地域のための優れた人材養成の場となり、知的に高度な地域サービスを提供する大学をつくりたい。さらに、岡山大学を国際的なネットワークの中で、人文社会、教育、環境、自然、医療の分野を包含した国際的なリジョナルセンターを持つ大学に押し上げ、そこから真に个性的な卓越した大学につくり上げていく。岡山の地にあつてこそ世界から人が集まり、世界に輝く大学に」

岡山大学のあるべき姿を示したこの森田ビジョンの具現化という使命のもと、開所した地域総合研究センター。よりよいまちづくりへ向け、地域と手を携えた大学の社会貢献がいよいよ始まった。

# 地域と大学が協働で 美しい学都創成

地方分権化が進む中、大学としての戦略的な地域貢献を通じて地域との絆を深め、魅力的な都市づくりを寄与することが期待される岡山大学地域総合研究センター（AGORA）。センター長の荒木勝理事（社会貢献・国際担当）にセンターの役割や今後の展開について聞いた。



センター長・荒木 勝 理事

## 地域総合研究センターの使命、役割は。

大学と都市、地域が協働して学都構想を具現化するための組織。学長から学生まで、それぞれのレベルで地域と協力して魅力的な大学、都市づくりをしたい。欧米では分権化の中で、既に地域活性化の切り札として大学と地域が協力関係を構築している。例えばフランスのストラスブール大学はもとも国立大学だが、10年ほど前から、地元の自治体から寄付を得るようになった。自治体が大学の運営全般に関わり、自分たちに必要な人材を養成するために連携組織も立ち上げている。財政的支援はもちろん、職員レベルでも協力し合い、成果を生んでいる。学生にとっても公共施設を便利に使えるなど、利点がある。日本でも人的交流、財政的交流など生活全般で

協力していく時代が来るだろう。

都市の大きな魅力に「人が育つ」というのがある。欧州では誇るべき教育機関を持つことが、住む都市選びの基準の一つになっている。岡山大学も市民に誇りに思ってもらえる大学でありたい。大学はキャンパスの内に閉じこもりがちだが、市民の皆さんとふれあうことが研究・教育のレベルを上げることにもなるだろう。

## 地域総合研究センター設立の経緯は。

岡山大学では、これまでも先生方個人の貢献活動をはじめ、医学部の地域医療、研究推進産学官連携機構と地元企業との技術的な連携、社会文化科学研究科での経済界、自治体、NPOなどの研究会開催など、地域連携の実績はあった。その数は年間約5700件に上る。ただ、大学全体としての地域貢献の姿が不明確で、戦略的に取り組む方法を模索していた。そこに森田ビジョンで、学都構想を具現化するセンターの必要性が明示され、設立に至った。

「AGORA」という名称には古代ギリシャの知恵を借り、「直接、人々が意見を交換する場、真剣な対話を通して信頼関係を築く場にした」という願いを込めている。

## 具体的にどのような活動になるのか。

すでに始動しているのが、同センター主催の「国際学術都市構想会議」と岡山市の呼びかけで実現した「経済戦略懇話会」。国際学術都市構想会議は岡山大学、岡山県、岡山市、倉敷市、経済同友会、商工会議所で構成し、グローバル化に対応するために必要なことを探る勉強会を開く。グローバル人材養成についての講演会や留学生をキーワードにしたまちづくりの構想もある。また自治体や経済界と協力して海外拠点を共同利用していく計画も持ち上がっている。経済戦略懇話会では、学都構想を踏まえ、岡山市、商工会議所とまちづくりなどについて活発に意見交換する。もう一つ、学生たちが学び、市民と対話し、まちづくりを行う場となる「まちなかキャンパス」づくりも急いでいる。机の上だけでなく、実生活を通じ、学ぶという形で教育を考える必要がある。その中で地域の人たちと絆が生まれてくるだろう。

センターには専任教員3人を置くほか、学内の教員パワーをまとめる協力教員会議、学的な体制としての連絡協議会を設ける。互いに協力し合い、機動的に活動したい。

# まちづくりに貢献

## AGORA開所式 シンポで意見交換



岡山大学地域総合研究センター（AGORA）が開所した11月15日、学内では記念式典やキックオフシンポジウムが開かれた。旧事務局棟前で看板を除幕した後、創立五十周年記念館で式典。森田潔学長が「AGORAのミッションの達成は容易ではないが、達成の暁には岡山大学と岡山地域は世界に輝く魅力的な学都に変貌すると確信している」とあいさつし、岡山県知事、岡山、倉敷市長から祝辞があった。

シンポジウムでは、文化庁長官の近藤誠一氏が「日本の未来、大学と地域の役割」と題して基調講演。近藤氏は「大学は地域の知の集積場所。都市がそれぞれの特性を生かし、文化芸術や美術という付加価値を付け、地域の人々が魅力を再発見し、まちに魅力が増し、若い人が戻ってくるという好循環を生む最初の力を大学は与えてくれるのではないか」と話した。

「地域が変わる〜大学と地域の創造的連携」と題したパネルディスカッションでは、岡山商工会議所副会頭の古市大蔵氏、日本経済研究所専務理事の傍士統太氏、直島福武美術館財団副理事長の福武純子氏、国土交通省官房審議官の花岡洋文氏が意見交換。「地域に根差すという意思を形にすべき」「地域の人たちとの密接なコミュニケーションが大切」「公民学の幅広い形での連携が学都創成につながる」「大学が元氣な所はまちも元氣。岡山大にももっとまちに関与してほしい」などの意見が出た。

### AGORA スタッフ紹介



助教  
岩淵 泰

いわぶち・やすし  
熊本大大学院社会文化科学研究科博士課程修了。仏・ボルドー政治学院、米・カリフォルニア大学パークレー校にて、まちづくりや参加民主主義を研究。福岡市生まれ。



副センター長・教授  
三村 聡

みむら・さとし  
法政大大学院社会科学部研究科修士課程修了。労働金庫連合会、金融財政事情研究会、商工会議所年金教育センター、現代文化研究所、愛知学泉大コミュニティ政策学部教授などを歴任。愛媛県生まれ。

地域の独自性大切に

備前焼を世界に発信



世界一長い焼き時間

備前焼の特長は、釉薬（表面にかけるうわぐすり）を使わず、およそ2週間高温で焼き締める焼き方にあります。そのため、非常に素朴で力強く、土の質感がそのまま伝わってきます。昔に比べ、焼く時間は短くなったとはいえ、これほど長く焼く焼き物は世界中どこを探しても他にありません。土は備前地方の山から流れて沈殿した粘土層で、有機物が多く、本来、焼き物に適していないかもしれません。それでも、備前の地では、先人たちの時代から、土に合った焼き方を徹底的に追求し、魅力ある焼き物を生み出しました。この有機物のような「不純物」も、生かすことができれば個性になります。素材の持ち味を生かす技術をつくり出すことが大切なのです。

備前焼の焼き色は、よく偶然の産物のように思われますが、土質や焼き方、温度などで全て計算されています。釉薬をかけず焼き締めだけ、という作り方なので、窯が作品に与える影響は非常に大きく、私は構造の違う四つの窯を使い分けています。

伊勢崎 淳 ISEZAKI Jun

備前焼の重要無形文化財保持者(人間国宝) × 岡山大学教育学部卒

2002年、新首相官邸の陶壁を備前焼で制作。近年は国内に限らず欧米など海外でも毎年展覧会を開く。「3年先まで予定が埋まっている」という多忙なスケジュールの中、今も制作を続ける。



- いせざき じゅん (75歳)
- ▶1936(昭和11)年 岡山県備前市生まれ
- ▶1959(昭和34)年 岡山大学教育学部特設美術科卒
- ▶1978~1987(昭和53~62)年 岡山大学教育学部特設美術科講師(陶芸)
- ▶1998(平成10)年 岡山県重要無形文化財保持者に認定
- ▶2004(平成16)年 重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定



視野広がった大学時代

岡山大学特設美術科(1953年4月設置)ができてすぐのころ入学しました。東京や京都の美術学校に行きたかったのですが、経済的なこともあり、自宅から通える大学を選びました。特設美術科は高等学校の教員養成目的に設置されたので、陶芸だけでなく、絵画や彫刻、染色といろいろ勉強しました。今思うと、視野を広げる良い経験になりました。サークルは馬術部に。京都大学との対校試合で落馬したのがいい思い出です。

育った環境から作家に

卒業してすぐ備前焼の作家になりました。この道に進んだのは、育った環境によるところが一番大きいです。小さいころから父が作っていたのを見ていたし、遊び場の山にある窯から出てくる焼き物や破片に触れて、親しんでいました。備前焼は生活の一部になっていました。技術についても、特に誰かに教わった実感はないのですが、小さなころから窯焚きや

改革の連鎖こそ伝統

物を作るのは楽しく、できあがったときの喜びは大きいです。まして、私は生まれた地でずっと過ごし、風土の中から生まれた備前焼を作らせてもらっており、作家としてやりがいを感じます。近年、外国でも釉薬を使わない焼き物が注目され、多くの人が備前に勉強に来ています。地域を大事にすることは、国内はもちろん、世界に向かって発信していくとき、必ず武器になります。ここにしかない、という独自性を武器にすることは非常に大事なことです。

備前焼には千年近い伝統がありますが、伝統とは、昔のものを守るだけではありません。今を生きる者の現代的な感性や創造性を加えて新しいものを生み出していくこと。そういう改革の連鎖が伝統になるのです。「常にその先頭で新しいものを生み出していく努力が大切」。そう思いながら制作活動が続けています。

# 山中 寿朗

自然科学研究科 准教授

**YAMANAKA Toshiro (40歳)**  
 ▶1970(昭和45)年 福岡県北九州市生まれ  
 ▶1994(平成6)年 九州大学理学部地質学科卒  
 ▶1999(昭和11)年 九州大学大学院理学研究科修了  
 ▶1999(平成11)年 九州大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 研究員  
 ▶2000(平成12)年 日本学術振興会特別研究員(PD)  
 ▶2001(平成13)年 九州大学大学院比較社会文化研究院助手  
 ▶2007(平成19)年 岡山大学大学院自然科学研究科准教授



「高度な知の創成と的確な知の継承」——。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

研究室 訪問

## 手がかりは深海にあり 生命誕生の地に迫る 鉱床発見で資源問題解決も



鹿児島湾の熱水噴出孔付近で見つかったアンチモンの硫化物「輝安鉱」の塊。割れ目にきれいな輝安鉱の金属光沢が見える

### 地道な調査が結実

「鹿児島湾にレアメタル鉱床 国内最大級」。今年4月、新聞各紙に大見出しが躍っていた。「もともとは、金鉱を探していたんです。ところが詳しく調べていくと、金だけでなく、(希少金属の一種)アンチモンがかなりの量あることが分かった。棚からぼた餅でした」。2007年6月、学生時代から研究を続けてきた鹿児島湾で、200度近い熱水が活発にわき

生命の起源とは。近年、地球最古の生命体と豊富な鉱物資源が存在するとして注目を集める深海底の温泉「熱水噴出孔」。ここをフィールドに調査・研究を続けているのが、地球化学を専門とする自然科学研究科(理)の山中寿朗准教授。生命誕生の秘密に迫る熱水噴出孔の調査と、資源問題を解決する糸口を探る研究を紹介する。

出る海底温泉「熱水噴出孔」を発見。以降も調査チームを結成して海域で採取した試料の分析と地質・地球化学・地球物理学探査を繰り返し、ついに鉱床の存在を突き止めた。10年以上に及ぶ、地道な調査の積み重ねが実を結んだ。

海底での調査はいたってシンプルだ。有人・無人の潜水艇や海中ロボットを使い、海底の水や泥、石などを採取。サンプルの成分や特長を細かく分析する。「船に乗れないとサンプルが採れない。1回目の乗船チャンスを得るまでが大変だった」。そのチャンスが巡ってきたのは大学院時代。海外での乗船調査に人手が足りないという。「この機会を逃すわけにはいかない」。すぐに参加を決めた。「そこで出会った研究者とのつながりでその後の乗船機会を確保できるようになった。九州大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー在籍時は年間110日ほど、船の上で過ごした」と振り返る。

### 生命の起源に興味

熱水噴出孔の調査を始めたきっかけは、「生命起源への興

味」という。熱水噴出孔からは水素、メタン、硫化水素といったガスや金属イオンなどが噴き出ている。これをエネルギー源に、有機物を合成する細菌などの微生物が食物連鎖の底辺を支える形で生態系を形成する。こうした環境は、いまだに多くの謎に包まれているが、近年は「生命誕生の場所」として有力視されている。山中准教授もそんな一人。「最初に誕生した生命は何か。その生命はどういう生活をしたか。地球とどう関わってきたのか。進化の道筋をたどってみたい」と力を込める。

### 基礎は地質学

「地球化学の基礎は地質学。地層を調べることで、45億年という時間の流れや地球内部までの空間的な広がりについて理解を深めることができるんです」。11月中旬、香川県高松市塩江町の山中に、山中准教授と学生の姿があった。「地質調査法実習」の現地調査だ。学生たちと山道を歩き、ハンマーで山肌を叩いて、岩石を割る。「この凝灰岩の層は、橋の下にあった凝灰岩の続



▲無人潜水艇「ハイバードルフィン」に熱水採取用の採水器を取り付ける山中准教授。機器の作動責任は研究者自らが負う=2007年6月



▲日本のはるか南方、マリアナ海域で熱水噴出孔探査のため「しんかい6500」に初乗船。水深3800mの深海底調査を行った=2003年10月

きでしょう」「この辺に同じ地層が見えてもいいよね」。こんなやりとりをしながら学生たちは地図に記号を入れ、地層の分布図を仕上げていった。「学生たちには野外での体験や他分野の研究者との交流を通じて多くのことを学んでほしい。自分自身、海底調査のためにさまざまな分野の研究者と共に船に乗ったことで世界が大きく広がった。学生時代こそ分野や所属にとらわれず、広い視点で学問の世界を見渡し、多くの知識を吸収して欲しい」

研究、スポーツ、趣味、特技... 学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなきらりと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。

# 酒井詩織

教育学部3年

SAKAI SHIORI



シード校6校、地区予選を突破した19校に東北学連選抜を加えた計26校が6区間38・6キロの距離を競う「第29回全日本大学女子駅伝」(日本学生陸上競技連合など主催)が10月23日、杜の都・仙台市で行われた。この大会に中四国予選を突破した岡山大学陸上競技部が初出場。最終区間で無念の繰り上げスタートとなり、1本のたすきをつなぐことはできなかったが、2時間18分39秒の17位でゴールした。

1区で最下位と出遅れたものの、2区(6.8キロ)の医学部保健学科4年原田一恵さんが9人を抜き17位に浮上する快走。その後は順位を守った。「5.8キロは長く感じたが、声援のおかげで走り切れた」と1区のMPPコース1年西脇舞さん。最長9.1キロの3区を走った教育学部1年佐藤あずささんは「楽しんで走ろうと思っ

## 初陣は17位 全日本大学女子駅伝

た。笑顔でたすきを渡せてよかった。スピード区間の4区(4.9キロ)を任された同2年安藤朋恵さんは「中距離が専門で距離に不安があったが、応援を力にペースを守れた」。最終6区の前3年渡部友紀子さんは「体調が万全でない中、仲間のサポートでゴールできた」と振り返った。



「入学した時からの憧れの場所。テレビでしか見たことのない遠い存在で、そこに自分が立っていられることがとてもなく幸せだった」。岡山大学として初めて駅伝の全国大会に出場した女子陸上部長距離パートのキャプテン酒井詩織さん(教育学部3年)は憧れの舞台を振り返る。

杜の都・仙台を駆け抜ける「第29回全日本大学女子駅伝」では5区(4.0キロ)を担当。「沿道からOB・OGらの声援がすごくてびっくりした。(レースは)自分との戦いで、応援が本当に力になった。またこの場所に立ちたいと感じた」

## 憧れの全国舞台で力走 一役なし、目標達成

9月23日に広島県の道後山高原クロカンパークで行われた中四国予選を勝ち抜き、手にした全国切符。しかし、その道のりは決して平坦なものではなかった。

たすきをつなぐ6人でチームを組めるようになったのはわずか3年前。さらに「国立大学なので強い選手ばかりを集めるこ

ともできず、専任の指導者もない。練習メニューも一から考える。(強豪の)私学の選手たちには考えられないことだと思う」(酒井さん)という状況で、全国大会はまさに夢舞台だった。

練習メニューはキャプテンの酒井さんが他大学の事例などを参考に試行錯誤しながら作成。

限られた時間の中で、それぞれが練習メニューをこなし、親元を離れているメンバーは栄養管理も自己責任で行った。

そんな厳しい環境の中、一時はチームがばらばらになりかけ、悩むこともあったという。その時に心掛けたのが「とにかく一人一人を愛することだけは忘れない」ということ。「信頼関係を築いてこそ、自分の気持ちが届く」と考え、これまで以上に、チームの一人一人に気を配りながらの練習を続けた。そ

して本番が近づくにつれ、チームはまとまり、初の全国大会で10位台に入るといふ目標を見事クリア。17位に入った。

選手と指導者の二役をこなした酒井さん。「競技をしながら指導するのは大変だった。でもみんなでつらいことを乗り越え、チームで団結して同じ目標を目指して走ることが、本当に好きなんです」と話す。

将来は、数学の教師になり、陸上の指導もしたいという酒井さん。「大学時代の経験は、これからの人生できっと役立つと思う」

大学生活での経験を力に、彼女はまだまだ夢に向かって走り続ける。



インタビュー  
岡山大学学生広報スタッフ  
法学部法学科2年  
安松佳祐

短期留学の学生が成果発表  
おかやま国際塾 1期生

国際感覚を身につけた人材の育成に取り組む「おかやま国際塾」の1期生の修了証授与式が11月5日、岡山市内であった。同塾は国際医療ボランティア・AMDA(同市北区)と岡山大学で国際法を教える教員らでつくる実行委が主催。公募に応じた法・医・歯学部の学生8人が自らプログラムを計画・立案し、8月23～28日、モンゴルで活動した。

7月17日に学内で開講式を行い、国際協力法やNGO論などを学んだ学生は準備が着手。モンゴルではAMDAが長年、眼科を中心とした医療支援活動を続けており、学生たちは現地の医学生との交流や孤児院での医療支援といった活動計画を立て、自分たちで交渉に当たった。修了証授与式では、学生たちが感じたことや今後の課題を発表。「自ら進んで行動することの大切さを学んだ」「互いの交流を社会人になっても続けたい」「研修の成果をより多くの人と共有すべき」などの意見が出た。



▲おかやま国際塾での活動成果を発表する学生たち  
= 11月5日、岡山国際交流センター

エラスムス・ムンドゥス・パートナーシップ  
プログラムを実施



▲プログラムの説明に聞き入る大学の関係者  
= 10月28日、岡山大学本部棟第一会議室

岡山大学などアジア圏の6大学とEUの6教育機関が連携し、相互留学などを通じて研究交流の強化を図る「エラスムス・ムンドゥス・パートナーシッププログラム(Action2)」の留学希望者らを対象にした説明会が10月28日、学内で開かれた。プログラムに参加するエコー・サントラル・パリ(仏)エコー・サントラル・ナント(仏)インペリアル・カレッジ(英)ミュンヘン工科大学(独)の4教育機関の教授らが来学。学生ら約40人を前に、欧州の6教育機関と日韓の6大学との交流促

進を目的とするプログラムの全体説明をした後、各教育機関の代表が研究留学の概要や大学のある街の紹介などを行った。説明会に先立ち、EUからの訪問団は留学生の宿泊場所の国際交流会館を見学。受け入れ先、派遣元となる七つの研究室も視察した。プログラムはEU会議・理事会に承認されたエラスムス・ムンドゥス計画の一部。欧州と日韓のパートナーシップ形成を目指し、博士課程の学生、ポスドク、教員らが相互に留学、交流を促進する。

研究担当理事・副学長

The Message from Executive Director

新理事紹介

11月1日付けで、山本進一氏(元名古屋大学大学院生命農学研究科教授)が研究担当理事・副学長に就任した。教育・研究担当だった阿部宏史理事は同日付けで、教育担当となった。



山本進一  
YAMAMOTO, Shin-ichi

岡山大学が潜在的に持っている研究力を世界レベルに押し上げた。『Okayama University』の知名度アップのためには、国際広報に力を入れ、国際的なランキングで実力が正当に評価される努力が必要。基礎研究を大切にしながら、成果を広く社会に還元するため産学官連携もさらに活発にしたい。

やまもと しんいち  
専門は森林生態学。京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。岡山大学農学部助教授、名古屋大学農学部教授、同大学院生命農学研究科長、同大副総長などを歴任。大阪市出身。



ホームカミングデイ 2011 を開催

岡山大学は、卒業後も母校との絆を大切に、国際的な教育研究拠点を目指す大学をともに育ててもらおうと、10月22日、「ホームカミングデイ2011」を開催した。訪れた卒業生は、再会した旧友や恩師と懐かしい時間を過ごしたり、現役の学生と語り合うなど、思い思いに楽しんだ。日ごろ、母校に帰る機会が少ない卒業生を招き、一日ゆっくりと過ごしてもらええる企画を用意。メイン会場となった創立五十周年記念館で歓迎式典があり、森田潔学長や小長啓一同窓会会長があいさつした。グリーンクラブ、ギターマンドリンクラブ、JAZZ研究会の3つの学生サークルが歌や演奏によるウ



エルカムコンサートを行ったほか、全学同窓会総会を開催。お茶席、福引き抽選会などは多くの人でにぎわった。同記念館の外では応援団総部が歓迎と送別の演舞を披露。現役学生が歩いて案内するキャンパスツアーのほか、各学部やサークルごとに講演会や懇親会、ミニ同窓会、OB OG交流戦など多彩な催しが開かれた。ホームカミングデイは、岡山大学の開学記念日(10月22日)に合わせて開催しており、今年で2回目。来年は10月20日に開催する予定。

詳細は、ホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/alumni/homecoming2011.html>) をご覧ください。



岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

## 9 September

9日 教育改善について教職員、学生が討議する本年度の全学教員研修「桃太郎フォーラム」を実施

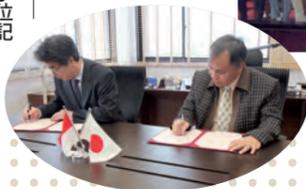
15日 定例記者発表を開催

16日 東京で「卒業生フオロアツプセミナー」を開催

16日 「本学・フエ大学院特別コース」第5期生8人の入学式をベトナム・フエ大学で挙



26日 インドネシア・マナド国立大学と大学間交流協定を締結



30日 平成23年度秋季学位記授与式を挙

30日 医歯薬学総合研究科の上原孝教授が日本学術振興会から本年度科学研究費補助金の配分審査において「有意義な審査意見を付した審査委員」として表彰される

## 10 October

11日 平成23年度秋季大学院入学式を挙



22日 「岡山大学ホームカミングイベント2011」を開催

22日 岡山大学留学生同窓会設立記念式典および第1回総会を国際交流会館で開催



## 10 November

22日 池田家文庫絵巻展「江戸時代の巨大手描き絵巻―国絵回復元!」(附属図書館など主催)を岡山市デジタルミュージアム(同市北区駅元町)で開催

23日 陸上競技部が第29回全日本大学女子駅伝に初出場

25日 定例記者発表を開催

## 11 November

2日 「岡山大学知恵の見本市2011」を創立五十周年記念館で開催



2日 医学部・歯学部が献体への協力者の法要を挙

3・5日 岡山大学祭(津島祭)を津島地区で開催



6日 「岡山大学ホームカミングイベント2011」の協賛イベントとして、創立五十周年記念館でテレビ番組の公開収録を実施

7日 岡山大学公式ツイッター運用開始

9日 岡山大学病院 歯科衛生士室の三宅香里さんが岡山市西消防署から人命救助の表彰を受ける



10日 防災に関する講演会を開催

## 11 November

11日 第3回中国四国男女共同参画シンポジウム「女性研究者が活躍する大学」を支援ネットワークの強化を目指して、岡山コンベンションセンター(岡山市北区駅元町)で開催



14日 ノーベル化学賞受賞者の根岸英一名誉博士が学術講演



15日 本学地域総合研究センターAGORAの開所式を挙。キックオフシンポジウムを開催

17日 定例記者発表を開催

19日 中国・洛陽市の河南科技大学と大学間交流協定を締結



19・20日 第35回収穫祭・農学部フェアを開催

26・28日 鹿田祭を鹿田地区で開催



27日 大学院社会文化科学研究科の鐸木道剛准教授がセルビア共和国から「セルビア国旗勲章第三等級章」を受ける

30日 津島地区総合防災訓練(地震訓練及び防火訓練)を実施

## 12 December

5・8日 大学間協定を結ぶインドネシア・ガジャマダ大学の教員らが大学院環境学研究科で地質調査技術などを研

7日 岡山大学つるるかむデーを開催

8日 カンボジア教育青少年スポーツ省の視察団が教育学部・教育学研究科などを訪問

## 研究・臨床成果

■大学院医歯薬学総合研究科の橋本平一郎教授(免疫学)と理化学研究所の共同研究チームは、抗原提示細胞の一つ樹状細胞が、抗原破壊の役割を持つキラーT細胞へ抗原を提示するために、タンパク質の折り畳みを助ける分子シャペロン「Hsp90」が必須であることを、その仕組みを分子レベルで明らかにした。[Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America: PNAS] 電子版に掲載。(9月・臨時記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の森田学教授(予防歯科学)のグループは、ラットを使った実験で、かみ合わせの異常がアルツハイマー病の原因といわれるアミロイドβを海馬に増加させることを世界で初めて証明した。米・神経科学雑誌「Neuro Molecular Medicine」に掲載。(9月・定例記者発表)

■資源植物科学研究所の杉本学准教授は、急激な温度変化や宇宙放射線など過酷な環境にある国際宇宙ステーション船外に13カ月間保管した大麦の種子が発芽生育し、品質や遺伝子などに変化がないことを明らかにした。宇宙での食料自給の可能性を示す成果。(9月・定例記者発表)

■大学院自然科学研究科の野原実教授、工藤一貴助教、大学院生の垣谷知美さんらのグループは、鉄と白金を含む新しい高温超伝導体を発見した。超伝導転移温度は絶対温度38ケルビン(摂氏マイナス235度)で、いわゆる鉄系超伝導体の中では3番目に高い。[Journal of the Physical Society of Japan] に発表。(9月・定例記者発表)

■大学院自然科学研究科の野上保之准教授らのグループは、デジタル情報を高速で暗号化し、暗号の安全性の強度を自在に変えられる高密度集積回路(LSI)を開発。独自に確立したアルゴリズム(演算式)を活用した。

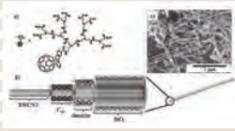


情報データの暗号化や認証処理の高速化が可能で、小型パソコンやスマートフォン(多機能携帯電話)への搭載が期待される。(10月・定例記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の森田学教授のグループは、口臭の原因である硫化水素が歯を支える骨(歯槽骨)を溶かす口腔細菌由来の毒素に作用し、その働きを相対的に増強することを世界で初めて証明した。米・歯周病専門雑誌「Journal of Periodontology」電子版に掲載。(10月・定例記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科(薬)の三好伸一教授らは本学インド感染症共同研究センター、インド国立コレラおよび腸管感染症研究所などと共同でコルカタ市の1〜5歳児約400人を対象に、プロバイオティクとしての乳酸菌飲料の下痢症予防効果について調査。計24週間の健康観察で、乳酸菌飲料を摂取した場合、下痢の発症率が14%抑えられたことが分かった。(11月・定例記者発表)

■大学院環境学研究科の高口豊准教授らのグループは独自開発したカーボンナノチューブ光触媒を用い、可視光による水の光分解で世界最高の水素発生効率(31%)を達成した。カーボンナノチューブの工業利用と水素製造の実用化研究に弾みが付くと期待される。「Advanced Materials」に掲載。(11月・定例記者発表)



# 環境生命科学研究科と自然科学研究科に改組

岡山大学は2012年4月、自然科学研究科と環境学研究科を再編＝図参照＝し、環境生命科学研究科と自然科学研究科に改組する。環境生命科学研究科は環境問題と食糧問題を国家・世界レベルの問題として捉えた新しい学問体系の構築を目指す。自然科学研究科は理学部と工学部を基盤とし、生活の利便性や安全、快適性の向上に寄与するための科学技術の進展を目的に、科学と工学のシナジー効果を備えた機動的な大学院へと発展させる。従来から進めてきた異分野融合研究については、研究科の垣根を越えた「先進複合領域副専攻」を設け、さらなる充実を図る。

